

●内閣府北方対策本部審議官賞●

学び続けるその先へ

かじあやの
加地彩乃

ひかわがし
出雲市立斐川東中学校3年(島根県)



「島はすぐそこだ。」北方領土を見た私は思わずそう声に出していました。島はずっとずっと遠く存在だと思っていたからです。

北方領土青少年視察事業で根室を訪れた二日目、天候にも恵まれ、望遠鏡も使わず、この目で北方領土を見ることができました。私はただただ、すぐそこにある島に手が届かないもどかしさでいっぱいでした。悔しいのです。手を伸ばせばすぐそこに。これが領土問題の壁なのです。それは日本とロシアとの壁です。

その後、北方館の副館長さんから「ロシア人は北方領土が返還されることを悪く思っていない。」と聞きました。私は「では、なぜこの問題は解決できないのか」と疑問に思いました。すると、副館長さんは「そこには国と国の問題がある。」とおっしゃいました。視察二日目で領土問題の壁に直面した私は、その壁をはねのけるために自分に何ができるのかということ課題として学習しました。

「自分に何ができるのか。」初めてそう思ったのは、授業で竹島の領土問題について学習したときでした。私は小六のときに兵庫から島根へ転校してきました。兵庫では、領土問題について学ぶ機会が少なく、竹島の位置すら分かりませんでした。地域での関心の差を実感したのです。そんな私は学校での授業をとおして、自分が正しい知識を身につけ、情報を発信することの大切さを学びました。

そして、私は去年、兵庫の友達に「領土問題解決に向けて取り組んでいるよ。」と伝えてみました。すると、「うちの力では無理やし、解決できひん。」と友達は言いました。私はすぐに反論しようとしたのですが、何も言えませんでした。なぜなら相手に自分の考えを伝える自信が持てなかったからです。そんな自分が悔しくて仕方ありませんでした。

そんな時、根室で学ぶ機会が巡ってきました。根室で

学習を深めていくうちに、自分が発信者になるだけでよいのだろうかと思うようになりました。そう思うようになったきっかけは、根室高校生のお話を聞いたことからです。根室高校では、意識調査を行ったうえで、署名活動やラジオ放送を行っていらっしゃいます。私は高校生の行動力に衝撃を受けました。

根室で高校生や地域の方々のお話を聞いた今、相手のことを知らずに発信することは、ただの一方通行だと気づきました。相手の領土問題に対する関心や相手国がどのように考えているのかを知らずに発信しても、問題解決に向けて前進しないのではないのでしょうか。

私はまず、自分の学校で意識調査を行いました。私の学校では、予想以上に領土問題に対する関心が高いこと、またもっと授業で進めるべきだと考えている生徒が多いことがわかりました。この意識調査を受けて、文化祭で現地の様子や領土問題解決に向けての私の考えを伝えました。文化祭後、「こんな考えを持つてるけど、どう思う?」と私に自分の考えを伝えてくれる友達が増えました。また、領土問題に関心がなかった両親も、私が学習を深めていく姿を見て、領土問題についての新聞記事を集めるようになりました。このようなことから、相手の考えを知ったうえで行う情報発信は相手に響くと気づくことができました。

領土問題解決のためには、相手国についても同じことが言えます。韓国やロシアの考えを知ることが、問題解決への糸口であると思います。今まで、領土問題について相手のことを知らなかった私は、根室の方々のお話を聞いて変わりました。

一方通行の関係からみんなが共通の目的に向かっていけるように、そして日本とロシア、日本と韓国との間の壁がなくなるように、これからも学び続けていきます。